

CO₂: ハワイ高地で400ppm超 「排出減だけで不十分」の声

毎日新聞 2013年05月31日 東京朝刊

米ハワイ島マウナロア山で今月9日、大気中の二酸化炭素（CO₂）濃度（1日平均）が初めて400ppm（1ppmは100万分の1）を超えて観測された。CO₂は産業革命以来増加の一途をたどる代表的な温室効果ガスで、温暖化のさらなる加速と被害拡大が懸念される。だが、対策強化に向けた国際交渉は当面難航しそうだ。

●温暖化「危険領域」

「私たちは歴史的な限界点を超え、危険領域に突入してしまった」

米海洋大気局（NOAA）がマウナロア観測所で「400ppm超」を観測したのを受け、国連気候変動枠組み条約のクリスティアナ・フィゲレス条約事務局長は声明を出し、危機感をあらわにした。

地球の大気は、窒素が約78%、酸素が約21%を占めているが、ほとんど温室効果がなく、1%程度しかない水蒸気やCO₂などの温室効果ガスによって、地球上の気温が保たれている。国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」は、20世紀半ば以降の世界の平均気温の上昇は、CO₂など人間活動によって排出された温室効果ガスによる可能性が高いとしている。

CO₂濃度の重要性は半世紀以上前から指摘され、マウナロアでは、世界で初めて1958年に濃度の観測が始まった。CO₂濃度は人口が多い地域や近くに工場などがあると高くなるが、標高3397メートル地点にある観測所は周辺の産業活動の影響をほとんど受けない。このため、世界全体でのCO₂増加を象徴する出来事として、欧米メディアもこぞって取り上げた。

南極の氷床の分析から、CO₂濃度は、産業革命前は約280ppmだったと推定され、過去80万年分の分析で、一度も400ppmを上回ったことはない。NOAAによると、50年代後半は年0.7ppmで増えていたが、最近の10年間は年2.1ppmに加速、上昇傾向が続いている。

昨年以降は、米アラスカ、カナダなど北極圏を中心に、世界各地でCO₂の月平均濃度が400ppmを超えた。国内では3カ所ある気象庁の観測地点のうち、岩手県大船渡市綾里で昨年3、4月に400ppm超を観測。南鳥島（東京都）、与那国島（沖縄県）でも今年4月までに超えた。

●除去技術に望み

mainichi.jp/feature/news/20130531ddm013040013000c.html